

鳥肌ものの大合唱

～ウイーン日本人会新年会の司会をつとめて～

ウイーン日本人学校初年度派遣教員 辻 正明

“年の初めのためしとて終わりなき世のめでたさを・・・祝う今日こそめでたけれ”冒頭、何事かと驚いていただいたのではないのでしょうか。

実は「日本人会」の4文字を私の脳が認識すると、たちまち冒頭の懐メロ(唱歌)が30年の年月を越えて、鳥肌を立てながらよみがえってくるのです。

今から30年前、1978年12月のことです。「辻さん、日本人会の新年会の司会をやってもらうことにしたよ。」日本人会の定例役員会から帰られたばかりの立岡校長先生の第一声である。「えっ、私で務まりますか？」とっさに切り返した。



当時の日本人学校5、6年とともに。右端が辻正明さん

「いや、あんたでないとあかんのや」の返事。校長先生の心中には、開校間もないウイーン日本人学校の存在をアピールする好機であるとの思いも宿っているようであった。

そんなこんなで、むべもなくお引き受けすることとなった。実際は司会進行だけでなかった。ゲームを考えたり、クイズを作ったり、景品を買い込んだりの仕事も込みであった。いささか失礼な言い方をすれば丸投げに近かったのだ。おかげ

で私のやりたいようにやらせていただくことができたのでもあるが・・・。

さて当日は、大使や公使のご臨席のもと、文字どおりウイーンの日本人コミュニティーが一堂に集い、打ち溶け合って楽しい一日をすごすこととなった。準備したゲームやクイズを子どもたちはもちろん大人たちも童心にかえって楽しんでくださった。そんな素敵な一日もいよいよフィナーレ。集いの最後をしめくくったのが、冒頭の「お正月」の大合唱である。

今は、もうその名さえ思い出せないがウイーン3区の Schwarzenberg(ラデツキー将軍の乗馬像の奥)にあるヨーロッパ建築の粋を集めた宮殿の大ホールに、日本人による日本のメロディーの大合唱が響き渡ったのである。正に鳥肌ものである。

もとより、音楽の都ウイーンに住む日本人は、世界一流の音楽を生で堪能する機会に恵まれている。しかし、このにわか作りの大合唱隊のすべての人が、これまでに経験したどんなコンサートやオペラ鑑賞でも味わうことのできなかつた命の洗濯をし、輝かしい新年を迎えてくださったのではないかと思う。

私たちは、海外に出てはじめて自分が日本人であることに気づかされる場面に遭遇するが、私の3年間のウィーン生活で最も私自身のルーツ、日本人の魂をくすぐられた瞬間でもあった。



当時の日本人学校の中学生とともに。右端が辻正明さん

私が、新年会の司会をつとめさせていただいたのは、1979年、1980年の2回。ちょうど、日本人会の創立21年目、22年目の年であった。振り返れば、早30年の年月を数えたが、きわめて心地よい青年教員時代の思い出としてよみがえってくる。

「ウィーン日本人会」には今も脈々と互助互恵の精神が受け継がれているにちがいない。

創立50周年の大きな節目を迎え

られ、これまで先輩諸兄が築き上げられた伝統を礎に、また新たな半世紀に向かって力強く歩み出されんことを、日本国より日本人魂（愛）を込めて声援しています。関係者のみなさま、たいへんご苦労さまです。

創立50周年、誠に、誠にめでとうございます。

ウィーン日本人学校万歳！！ ウィーン日本人会万歳！！



当時の教職員。前列右から2人目が立岡校長先生

<辻 正明>

1978年4月、補習授業校だったオーストリア・ウィーン日本人学校に赴任し、同年9月の全日制ウィーン日本人学校設立・開校に立ち会う。1981年3月まで3年間、ウィーンに滞在。滋賀県・野州町教育委員会教育部長などを歴任し、現在、野州市教育研究所副所長。著書「夢青きドナウの流れ～ウィーン日本人学校創設期」（2003年、創友社刊）に日本人学校の思い出をまとめた。